

女子大学新入生の大学生活における不安について

—— 3年度分データの比較検討 ——

心理学科 川上正浩

抄録：大学生活をスタートさせる新入生は、新規な刺激である大学生活に対してさまざまな不安を持っていると予想される。こうした不安の解消が、その後の大学生活を十全なものにするには不可欠である。本研究では、女子大学心理学科に入学した新入生を対象に、大学生活に対する不安についての質問紙調査を実施した。この、新入生に対するデータ収集を3年度に渡って実施し、このデータを対象に、年度ごとの新入生のデータを比較検討することにより、年度間の差異および共通性に注目した。3年間の調査を通じて、大学生活不安に関する評定値や、大学生活不安と達成動機、社会的スキルとの関係については、比較的安定していることが見て取れた。一方で、大学生活不安の下位尺度である大学不適応については、必ずしもその理由が一貫したものでないことが示唆された。今後、こうした大学不適応感をいかにして検出するのか、またその大学不適応感に大学としていかに対応するのかを含めた検討が必要とされている。

キーワード：女子学生 新入生 大学生活不安 達成動機 社会的スキル

問題と目的

新入生にとっての大学生活は、新規な刺激であり、不安を感じさせるものとなりうる。この不安をすみやかに解消することが、その後の大学生活全般を十全なものとして充実させていくためには不可欠である。

こうした観点から、川上（2004）は、女子大学の新入生を対象として大学生活不安を測定し、これとその他の個人特性との関連について吟味した。

大学生活不安と、個人特性との関係を吟味した先行研究としては、たとえば、小塩（2004）の研究が認められる。小塩（2004）は、大学生活不安と自己愛傾向の2成分モデルによって分類された4群との関連を検討している。その結果、自己愛全体が低く“注目・賞賛欲求”が優位な者ほど、全体的な大学生活不安を感じる傾向にあることが示された。さらに大学生活不安の下位側面に注目

すると、自己愛全体が低く“注目・賞賛欲求”が優位な者ほど日常生活不安が高い傾向にあり、自己愛全体の高低にかかわらず“注目・賞賛欲求”が優位な者ほど評価不安が高い傾向にあることが示された。

しかしながら、川上（2004）の研究では、大学生活をスタートさせる新入生に限定して大学生活不安を取り扱っていくことを目指しており、そうした観点から、大学生活不安と関連する個人特性として、達成動機と社会的スキルの2つが想定され、これらが大学生活不安と同時に測定された。

達成動機が大学生活不安と関連すると想定される理由は、達成動機として測定されるいわゆる「やる気」の高さが、大学生活という新生活に対する不安を軽減させると考えられたからである。

一方、社会的スキルが大学生活不安と関連すると想定される理由は、大学生活不安の根本に、大学での新しい人間関係形成に対する不安が存在し

ているのではないかと考えられたからである。こうした人間関係形成に対する不安は、社会的スキルが高い個人においては相対的に低いことが想定され、このことは結果的に大学生生活不安を低くさせると考えられる。

川上（2004）による質問紙調査の結果、大学生生活不安の下位尺度である、日常生活不安、評価不安、大学不適応が相互に関連していること、競争的達成動機の高さと大学生生活不安の高さが関連すること、社会的スキルの低さが大学生生活不安の高さに関連すること、の3点が示唆された。

当初の想定に反して、競争的達成動機の高さは、むしろ不安の高さと関連していることが示された。これは競争的達成動機の高い学生は、大学生生活をむしろ競争的な場面であると捉えるために、そうした“競争”に対する不安をより強く感じるためであると解釈された。

この研究の結果認められた、大学生生活における不安と社会的スキルの低さとの関連は注目に値する。しかしながら、この研究はあくまでも特定のケース研究であるにとらえられるべきである。そこで川上（2005）は、男子大学生を含む異なる大学の学生を対象に、川上（2004）と同様の調査を行い、比較検討を行っている。

川上（2005）において調査対象とされた大学生は、以下の4点において川上（2004）の調査対象者と異なっていた。すなわち、

- (1) 女子大学ではなく共学であること。
- (2) 昼間ではなく夜間のコースであること。
- (3) 心理学系の学科ではなく、福祉系の学科であること。
- (4) 調査時期が入学当初ではなく9月であること。

の4点である。

しかしながら、こうした相違点にもかかわらず、川上（2005）における女子大学生のデータは、（川上（2004）のデータにおいては認められた）

大学不適応と評価不安、競争的達成動機との相関が認められないことを除いて、川上（2004）のデータとほぼ整合的な結果を示した。男子大学生においては、日常生活不安と競争的達成動機との相関が認められないことのみが川上（2004）との相違点であった。

対象者の特性における複数の相違点の存在にもかかわらず、上述の点以外では2つの研究で整合的な結果が得られたことは、これらの研究結果の頑健性を示していると考えられることができる。

一方で、特に競争的達成動機に関わる結果に相違が認められたことは、上述の2つの大学の特性の差異に起因している可能性もあるが、この点に関しては現時点では明らかではない。さまざまな特性を有する複数の大学をケースとすることにより、より立体的な検討が望まれる。

それでは、2つの研究の相違点として認められる結果は、先述の4つの相違点に基づく結果だと解釈されるべきであろうか、それとも、それぞれの研究の対象となった特定調査対象者間の差異に基づく相違点だと解釈されるべきであろうか。

こうした点について明らかにするため、本研究では、川上（2004）の研究と同一の大学、同一の学部学科、同一の時期に、当該年度に一回生である調査対象者（したがって、年度ごとに、調査対象者自体は異なることになる）に同一の質問紙調査を実施し、これらの年度間の差異および共通性に注目することとする。調査は筆者が所属する女子大学において実施されたが、数年に渡る質問紙調査の結果に、高い共通性が認められれば、その結果は、特定の調査対象者集団に認められる傾向ではなく、少なくとも特定の大学に所属する学生の一般的な傾向であると見なすことができるだろう。こうした基盤を固めていくことにより、異なる大学における結果との比較検討を行っていくに際しても、安定した議論を展開していくことが可能になると思われる。

方法

調査対象者

2003年度から2005年度において、大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科に所属する1回生、339名が調査に参加した。調査対象者の平均年齢は18.2歳 ($SD=0.5$)であった。ただし、2003年度に調査に参加した調査対象者は117名 (平均年齢18.2歳, $SD=0.7$)、2004年度に調査に参加した調査対象者は121名 (平均年齢18.2歳, $SD=0.4$)、2005年度に調査に参加した調査対象者は101名 (平均年齢18.1歳, $SD=0.3$)であった。

質問紙の構成

(1) 大学生生活不安尺度 (藤井, 1998)

大学生が学生生活において感じている不安の種類や水準を測定するために開発された尺度である。“日常生活不安”“評価不安”“大学不適応”の3つの下位尺度から、大学生において特徴的に認められる不安感の程度を測定する。

(2) 達成動機測定尺度 (堀野, 1987)

“ものごとを最後までやり遂げたい”“困難なことにも挑戦し、成功させたい”という動機である“達成動機”を測定するために開発された尺度である。社会的・文化的に価値があるとされることを成し遂げたいとする欲求である“社会的達成欲求”と自分自身にとって価値のあることを成し遂げようとする“個人的達成欲求”との両面を測定するために作成されたが、これらはその後の研究 (堀野・森, 1991)において、“個人的達成欲求”は“自己充實的達成動機”に、“社会的達成欲求”は“競争的達成動機”の概念に発展している。

(3) KiSS-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18項目版: 菊池, 1988)

“対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル

(技能)”である社会的スキルを身につけている程度を測定するために開発された尺度である。① 初歩的なスキル, ② 高度のスキル, ③ 感情処理のスキル, ④ 攻撃に代わるスキル, ⑤ ストレスを処理するスキル, ⑥ 計画のスキル, の6つを含んでいる。

手続き

2003年度から2005年度の3年度に渡り、各年度の新入生 (1回生) に入学当初の4月中旬から下旬に、質問紙調査を実施した。調査参加者は、心理統計法のクラスにおけるコースクレジットとして、集団で質問紙調査に参加した。上記の3尺度が講義時間に配布され、調査参加者には個人ペースでこれらに回答することが求められた。回答所要時間は約15分であった。

結果

本研究は、3年分のデータを比較し、大学生生活不安に関して、年度間の差異と共通点について考察することを目的としている。したがって、まず各年度のデータそれぞれを対象として、各下位尺度間の相関について吟味する。

2003年度データ

各尺度における平均値および標準偏差を図1に示した。また各尺度間の相関係数を表1に示した。大学生生活不安尺度を構成する3つの下位尺度間には、相互に高い相関が認められた (表1参照, $p<.01$)。

日常生活不安と大学不適応は、競争的達成動機と正の相関を示した ($p<.05$)。

日常生活不安、評価不安は、社会的スキルと負の相関を示した ($p<.01$)。また、自己充實的達成動機と社会的スキルとの間に正の相関が認められた ($p<.01$)。

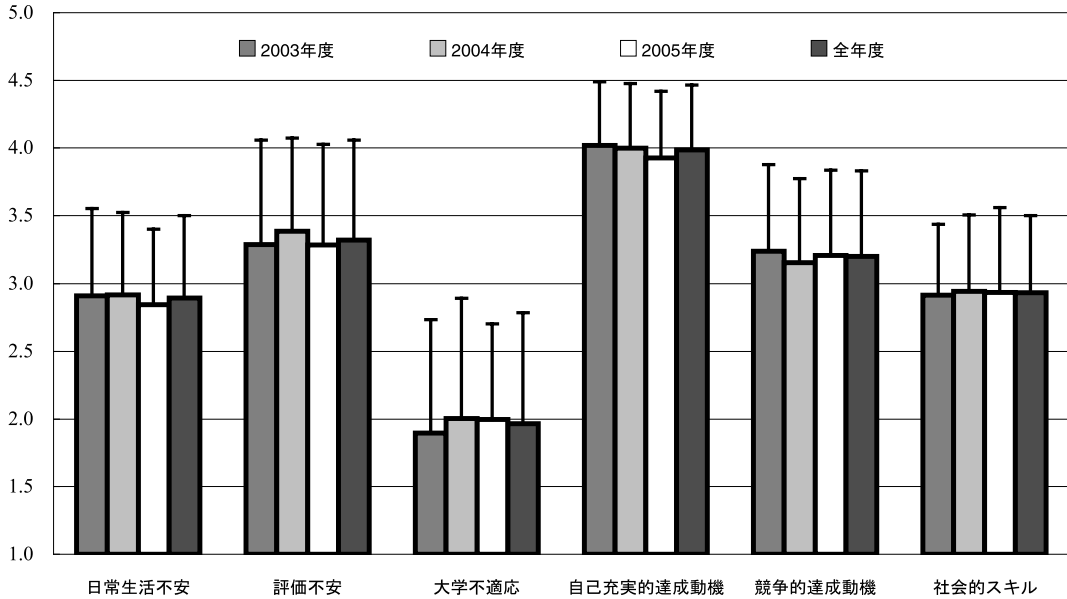


図1 各年度および全被験者の下位尺度の平均点 (max=5) と標準偏差

2004年度データ

各尺度における平均値および標準偏差を図1に示した。また各尺度間の相関係数を表2に示した。大学生生活不安尺度を構成する3つの下位尺度間のうち、日常生活不安と評価不安との間にのみ、高い相関が認められた(表2参照, $p<.01$)。

日常生活不安と大学不適応は、競争的達成動機と正の相関を示した($p<.01$)。

2003年度データ同様、日常生活不安、評価不安は、社会的スキルと負の相関を示し($p<.01$)、また、自己充實的達成動機と社会的スキルとの間に正の相関が認められた($p<.01$)が、2004年度データでは、社会的スキルと大学不適応の間にも負の相関が認められた($p<.05$)。

また自己充實的達成動機と評価不安との間に、弱い負の相関が認められた($p<.05$)。

2005年度データ

各尺度における平均値および標準偏差を図1に示した。また各尺度間の相関係数を表3に示した。大学生生活不安尺度を構成する3つの下位尺度間の

うち、日常生活不安と評価不安との間にのみ、高い相関が認められた(表3参照, $p<.01$)。

競争的達成動機と大学生生活不安の間には有意な相関が認められなかった。

日常生活不安、評価不安は、社会的スキルと負の相関を示した($p<.01$)。また、自己充實的達成動機と社会的スキルとの間に正の相関が認められた($p<.01$)。

年度間の得点の差異に関する分散分析

年度ごとに、各尺度得点の間に差異が認められるか否かを、二要因分散分析によって検討した。3(年度:2003年度,2004年度,2005年度)×6(尺度:日常生活不安,評価不安,大学不適応,自己充實的達成動機,競争的達成動機,社会的スキル)の2要因分散分析の結果、年度の主効果は認められなかった($F(2,336)<1, n.s.$)。尺度の主効果は認められた($F(5,1680)=369.56, p<.01$)が、年度と尺度との交互作用は認められなかった($F(10,1680)<1, n.s.$)。

本分析における尺度の主効果は、それぞれの尺

表1 2003年度データにおける下位尺度間の相関係数

	日常生活不安	評価不安	大学不適応	自己充實的 達成動機	競争的 達成動機	社会的スキル
日常生活不安	1.000	.771**	.287**	-.094	.209*	-.481**
評価不安	.771**	1.000	.358**	-.046	.090	-.386**
大学不適応	.287**	.358**	1.000	-.123	.225*	-.030
自己充實的達成動機	-.094	-.046	-.123	1.000	.113	.261**
競争的達成動機	.209*	.090	.225*	.113	1.000	-.024
社会的スキル	-.481**	-.386**	-.030	.261**	-.024	1.000

* $p < .05$, ** $p < .01$.

表2 2004年度データにおける下位尺度間の相関係数

	日常生活不安	評価不安	大学不適応	自己充實的 達成動機	競争的 達成動機	社会的スキル
日常生活不安	1.000	.642**	.157	-.038	.262**	-.443**
評価不安	.642**	1.000	.126	-.183*	.163	-.428**
大学不適応	.157	.126	1.000	-.088	.238**	-.205*
自己充實的達成動機	-.038	-.183*	-.088	1.000	-.036	.324**
競争的達成動機	.262**	.163	.238**	-.036	1.000	-.039
社会的スキル	-.443**	-.428**	-.205*	.324**	-.039	1.000

* $p < .05$, ** $p < .01$.

表3 2005年度データにおける下位尺度間の相関係数

	日常生活不安	評価不安	大学不適応	自己充實的 達成動機	競争的 達成動機	社会的スキル
日常生活不安	1.000	.670**	.154	-.057	.170	-.501**
評価不安	.670**	1.000	.090	-.030	.082	-.409**
大学不適応	.154	.090	1.000	.033	-.009	-.075
自己充實的達成動機	-.057	-.030	.033	1.000	.188	.438**
競争的達成動機	.170	.082	-.009	.188	1.000	.127
社会的スキル	-.501**	-.409**	-.075	.438**	.127	1.000

* $p < .05$, ** $p < .01$.

表4 3年度分データにおける下位尺度間の相関係数

	日常生活不安	評価不安	大学不適応	自己充實的 達成動機	競争的 達成動機	社会的スキル
日常生活不安	1.000	.698**	.203**	-.059	.216**	-.469**
評価不安	.698**	1.000	.203**	-.085	.108*	-.404**
大学不適応	.203**	.203**	1.000	-.071	.166**	-.108*
自己充實的達成動機	-.059	-.085	-.071	1.000	.084	.341**
競争的達成動機	.216**	.108*	.166**	.084	1.000	.019
社会的スキル	-.469**	-.404**	-.108*	.341**	.019	1.000

* $p < .05$, ** $p < .01$.

度における平均点が異なっていることを示しているので、以降の検討は行わない。本分析の結果、年度の主効果、年度と尺度との交互作用のいずれもが認められなかったことから、各尺度の平均点は、年度によって異なるとは言えないことが示された。

3年度分のデータをまとめた分析

上記の分析を受け、本研究のすべてのデータ、すなわち3年度に渡るデータを、その年度にかかわらず、同質のデータであると見なし、339名のデータとして、年度ごとの分析と同様、各下位尺度の平均点を算出し、さらに各尺度間の相関係数を算出した。その結果を図1および表4に示した。このデータにおいては、大学生生活不安尺度を構成する3つの下位尺度間には、相互に高い相関が認められた(表4参照, $p < .01$)。日常生活不安と大学不適応は、1%水準で競争的達成動機と正の相関を示し($p < .01$)、評価不安は5%水準で競争的達成動機と正の相関を示した($p < .05$)。

大学生生活不安を構成するすべての下位尺度は、社会的スキルと負の相関を示し(日常生活不安, 評価不安は $p < .01$, 大学不適応のみ $p < .05$)、また、自己充實的達成動機と社会的スキルとの間に正の相関が認められた($p < .01$)。

考 察

本研究では、大学生生活に関する不安と、達成動機、社会的スキルといった他の個人属性が、あるいはそれらの関係が、同一の大学、同一の学部学科、同一の時期の新入生において、どの程度の安定性を示すのかを検討した。

3年度に渡るデータ収集の結果、大学生生活不安に関する評定値(図1参照)や、大学生生活不安と達成動機、社会的スキルとの関係(表1~表3参照)については、比較的安定していることが見て取れた。

年度によっては、大学生生活不安を構成する下位尺度間に、相関が認められない部分もあるが、日常生活不安と評価不安の間には、一貫して高い相関が認められており、この傾向はすべての調査参加者を対象とした分析においても示されている(表4参照)。一方で、大学不適応と日常生活不安および評価不安との間の相関は、すべての調査参加者を対象とした分析においては認められているものの、年度ごとの分析においては、相関が認められなかったり(表1参照)認められなかったり(表2および表3参照)している。こうした不安定さは、各年度で認められる大学不適応を高く示す学生の特徴が必ずしも一貫していないことによるものであると推測される。すなわち、毎年、大学に対して不適応感を示す学生はそれなりに存在しているが(このことは、大学不適応得点の平均値が年度を越えて比較的安定していることから推測される)、その不適応感の“中身”については、必ずしも一貫しておらず、個人個人がそれぞれの不適応感を抱いていることを想定させる。過去の研究においては、たとえば、大学進学時に、専門的な知識を身につけることや教養を深めること、といった学業と関連した内容を重視する学生は、その後の大学での適応が良好になる(たとえば安達, 1999; 小嶋, 1998; 中西・那須, 1980)といった結果も認められるが、大学における不適応感は、必ずしも特定の原因と結びつくようなものではないのであろう。

たとえば溝上(2002)は、“大学生という時期を人生の中で充実させなければならない唯一の時期だととらえ、かつそれを果たすだけの活動がおこなえていない自分に対して生じる焦りの感情”を、ユニバーシティ・ブルー(University Blue)と定義し、「このまま何も見つけられないまま大学生生活が終わってしまうのではないかな? やりたいことをはやく見つけなければ! 入学してからの半年があっという間に過ぎ、このまま四年間も過ぎていくのではないかと感じた」といった学生のこ

メントを紹介している。このような、学年進行に伴ってむしろ増大すると推測されるような不安感もあれば、本研究で問題としているような、大学生活をスタートするにあたって感じるような不安感もある。こうした多様な不安感、あるいは不適応感を、個別に扱っていくことが、大学側のきめ細かな対応として求められているのであろう。

一方で、個人特性としての社会的スキルは、大学生活不安を構成する下位尺度である日常生活不安および評価不安と一貫して高い負の相関を示している（表1～表4参照）。本研究が新入生の入学当初のデータであることを鑑みると、少なくとも入学当初において、大学生活に対する不安の多くは、本人が認知する自らの社会的スキルと関係していることが見て取れる。すなわち、新しい生活である大学生活を始めるにあたって、そこでの対人関係がうまく営めるのかということに根を持つ不安が大学生活全般に波及し、特に自らの社会的スキルを低く評価するものほど、こうした不安を高く感じるという構造が推測できる。木村・小林・松田（2003）は、大学生を対象とした質問紙調査の結果、大学生の特徴としては「対人関係ストレスラー」と「自己に関するストレスラー」の双方が「抑うつ・不安」の表出と関連していることを示している。このように、大学生活において、対人関係が大きな比重を占めていることは、本研究の結果からも見て取れる。

今後、こうした対人関係を軸に据えながら、個別的問題であると言える大学不適応の問題についてアプローチしていくことが必要であろう。大学は学問の場であるが、もはやそれだけに留まる場ではない。それは、“学生生活”という言葉が、少なくとも学生自身にとって、何を意味する言葉であるかを考えてみれば自明であろう。こうした観点から、大学の側にとっても、本研究で扱っているような大学生活不安、あるいは大学生活の満足度（藤井，1998；佐久田・奥田・川上・坂田，2003；奥田・川上・坂田・佐久田，2003；川上・

坂田・佐久田・奥田，2004；坂田・佐久田・奥田・川上，2005；川上・坂田・佐久田・奥田，2005）について検討し、対応していくことが、学問教育の場としての大学が、その成果をあげていくことにつながると想定される。

付記：本研究のデータの一部は、日本教育心理学会第46回総会（川上，2004）において報告された。

引用文献

- 安達智子 1999 理科系大学1年生の大学選択動機と入学後の適応について—就業動機志向による比較—進路指導研究, 19, 22-29.
- 藤井義久 1998 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 441-448.
- 堀野 緑 1987 達成動機の構成因子分析—達成動機概念の再検討 教育心理学研究, 35, 148-154.
- 川上正浩 2004 大学生活に対する不安について (1) 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 158.
- 川上正浩 2005 大学生活に対する不安について (2) 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 281.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 2004 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (3) —出身校、居住形態との関連から—大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 3, 57-68.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 2005 心理学科オリエンテーションに関する研究 (1) 日本心理学会第69回大会発表論文集, 1251.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 木村愛・小林正幸・松田修 2003 大学生のストレス過程に関する検討—認知的評価と個人内要因に注目して—東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 27, 27-40.
- 小嶋明子 1998 高校から大学へ 会沢勲・石川悦子・小嶋明子 (編著) 移行期の心理学 ことごと社会のライフイベント プレーン出版, 115-146.
- 溝上慎一 (編) 2002 大学生論 戦後大学生論の系譜をふまえて ナカニシヤ出版
- 中西信男・那須光章 1980 進路を決める—高校生へのアドバイス 有斐閣新書
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 2003 個

- 人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響(2) —personality との関連から— 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **2**, 73-82.
- 小塩真司 2004 自己愛傾向と大学生活不安の関連 人文学部研究論集(中部大学), **12**, 67-78.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 2005 オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **4**, 75-86.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 2003 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響(1) —オリエンテーションに対する態度の基礎データ—大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **2**, 59-71.

College Life Anxiety for female freshmen

— Examination of data for three years —

Osaka Shoin Women's University
Masahiro KAWAKAMI

ABSTRACT

The freshmen who start the college life have various anxiety for their college life. The cancellation of such anxiety is indispensable to their substantial college life afterwards. In this research, the questionnaire investigation of anxiety for their college life was executed over three years for the freshmen who entered the psychology department of women's university. The difference and the consistency among these years were investigated. The data showed the comparative stability and reliability about the degree of college anxiety for freshmen and the relation among a rating value of college life anxiety, an achievement motivation, and a social skill over three years. On the other hand, it was suggested that the reasons of feeling of maladjustment to their college are not necessarily consistent to each freshman. It is needed that to examine the way to detect such college anxiety and the feeling of maladjustment to their college life and that to manage them.

Key words: female college student, freshmen, anxiety for college life, achievement motivation, social skill